

アレキシサイミア傾向者の対人関係のあり方と共感性に関する検討

—質問紙法とロールシャッハ法による比較—

20002FRM 服部 紗幸

キーワード：アレキシサイミア, ロールシャッハ法, 対人関係

I. 問題と目的

1. アレキシサイミアについて

心身症患者にみられる特徴として Sifneos (1973)はアレキシサイミアという概念を提唱した。アレキシサイミアは①自身の感情や身体感覚の知覚困難, ②感情を表現することの困難, ③空想の乏しさ, ④自己の内面よりも外的な事実への関心などの特徴をもつとされている (Taylor, 1984)。

2. アレキシサイミア研究

津山・中村(2012)は、アレキシサイミアと愛着の関連について調査した結果、アレキシサイミア傾向が高い者ほど回避型の愛着傾向をもつことを報告した。回避型の愛着パターンをもつ者は親密な関係を回避するという特徴をもつ (岡田, 2011)ことから、アレキシサイミア傾向者は回避的な対人関係を呈するのではないかと考えられる。

守口(2014)は、「臨床的な経験から、アレキシサイミアの人々は、他者との生き生きとした交流を保てず、共感性に欠け、社会生活でも適応的でないなど、他者との関係・社会性などの問題も重要な特徴である」と報告している。また、アレキシサイミアと共感性との関連について調査した多くの研究において、アレキシサイミアを呈する者は共感性が低いことを報告している。以上より、アレキシサイミアを呈する者は共感性が低いと考えられる。

3. 目的と意義

アレキシサイミアを呈する者は対人関係のあり方と共感性に問題があると考えられるが、その特徴を明らかにすることで、臨床群におけるアレキシサイミアを呈する者のアセスメントにつなげることができるのではないだろうか。そ

こで本研究では健常群を対象に質問紙調査を実施し、アレキシサイミア傾向者の対人関係のあり方と共感性について明らかにすることを目的とする。

II. 研究 1

1. 方法

(1)調査対象者および分析対象者

A 大学に通う心理学部の学生に調査を行い、男性 30 名、女性 80 名、不明 3 名の計 113 名のデータを分析の対象にすることとした。

(2)質問紙の構成

①アレキシサイミアを測定する Galex(16 項目)、②対人関係を測定する青年期用対象関係尺度(29 項目)、③共感性を測定する多次元共感性尺度(24 項目)、④フェイスシート(学年、年齢、性別)、⑤ロールシャッハ法実施に関する依頼書、の 5 つから質問紙を構成した。

2. 結果

アレキシサイミアと対人関係のあり方の相関係数を算出した結果、アレキシサイミアと「親和不全」、「見捨てられ不安」、「一体性の過剰希求」、「希薄な対人関係」との間には正の相関がみられたが($r = .447, p < .01$; $r = .404, p < .01$; $r = .254, p < .01$; $r = .390, p < .01$)、「自己中心的他者操作」との間には有意な相関がみられなかった($r = -.070, ns$)。

アレキシサイミアと共感性の相関係数を算出した結果、弱い正の相関がみられた($r = .223, p < .05$)。そのため各下位尺度の相関係数を算出した結果、「体感・感情の認識表現不全」は「被影響性」、「想像性」との間に正の相関がみられたが($r = .380, p < .01$; $r = .448, p < .01$)、「他者指向的反応」、「視点取得」、「自己指向的反応」

との間に有意な相関はみられなかった($r = .182, ns; r = .006, ns; r = .181, ns$)。「空想・内省の不全」は「他者指向的反応」, 「視点取得」, 「想像性」との間に負の相関がみられたが($r = -.287, p < .01; r = -.333, p < .01; r = -.440, p < .01$)、「被影響性」, 「自己指向的反応」との間に有意な相関はみられなかった($r = .104, ns; r = .006, ns$)。

III. 研究 2

1. 問題と目的

質問紙法は回答者の意識できる側面しか測定できないことが短所として挙げられる。このような質問紙の短所を補うことのできる検査として投映法がある。そこで研究 2 ではロールシャッハ法を実施し、アレキシサイミア傾向者の特徴に関して更なる検討することを目的とする。

2. 方法

(1) 群分け

検査対象者を選別するために、各尺度の平均値を算出して群分けを行った。その結果、アレキシサイミアは $M = 50.29 (SD = 8.48)$ であったため、50 点以下を低群、51 点以上を高群、対人関係のあり方は $M = 67.64 (SD = 12.15)$ であったため、67 点以下を非ネガティブ群、68 点以上をネガティブ群、共感性は $M = 85.21 (SD = 9.52)$ であったため、85 点以下を低群、86 点以上を高群とした。

(2) 検査対象者

ロールシャッハ法の検査対象者は質問紙に付属した、ロールシャッハ法実施に関する依頼書に必要事項を記入した者の中から、①アレキシサイミア傾向高群・対人関係ネガティブ群・共感性低群の者、②アレキシサイミア傾向高群・対人関係非ネガティブ群・共感性高群の者、③アレキシサイミア傾向低群・対人関係ネガティブ群・共感性低群の者、④アレキシサイミア傾向低群・対人関係非ネガティブ群・共感性高群の者、に実施することとした。該当者は 27 名であり、そのうち①4 名、②3 名、③5 名、④4 名の計 16 名にロールシャッハ法を実施した(以

下、①~④を 1 群~4 群と示す)。

3. 結果と考察

1 群は H% の高さ、H/反応の多さから対人恐怖や対人不安を抱えていることや、Hd 反応の多さから対人関係において未熟な面がみられたことから、人とうまく関われないと考えられる。2 群は「2 人」といった反応など、他者を意識した反応がみられた一方で「影」といった漠然とした不安も産出され、人への関心の高さはあるが、人と関わることに対する不安も抱えていると考えられる。また、アレキシサイミア傾向者は非アレキシサイミア者と比較してポジティブ感情の喚起が少なく、そのことが対人関係に影響を及ぼしていると推察される。

1 群の中には M 反応が 0 個の者がいた一方で、2 群の中には M 反応が 12 個産出された者がおり、2 群は 1 群よりも共感性が高いことが明らかとなった。

IV. 総合考察

1 群の中には N% が高く、ポジティブ感情が喚起されず、人間反応が産出されていない者がおり、その者は「親和不全」や「希薄な対人関係」のあり方を呈していると推察される。一方で 2 群の中には受け入れられない感情を抑制し、他者との関係を美化することで対人関係を保っている者がおり、その者は「見捨てられ不安」や「一体性の過剰希求」のあり方を呈していると推察される。1 群の者は M 反応が 0 個であり、共感性の低さが明らかとなった。この共感性の低さには両親との関係性が影響を及ぼしていると考えられる。2 群の者は M 反応が 12 個産出され、共感性の高さが明らかとなった。M 反応の内容からは“同じ動きをしている”ものが多くみられたため、他者に合わせることを示す「被影響性」のような特徴を呈していると考えられる。

本研究では健常大学生を対象に質問紙調査およびロールシャッハ法を実施したが、本研究で得られた結果が臨床群においてもみられるのか検討することが今後の課題であろう。